

10章5節から始まった派遣説教もいよいよ本日の箇所が結びとなります。
この箇所では「受け入れる人の報い」という小標題が掲げられています。ここでマタイはもう一度「派遣」とは一体何だったのかを11-15節にまで遡って、そのテーマを再確認します。それは14節にある「迎え入れ」なのです。同じ語が本日の箇所では「受け入れ」と訳されて6回も用いられています。そして、神(わたしを遣わされた方)－わたし－弟子たち－受け入れる者という四者を繋ぎ合わせ、受け入れる者の受けるべき報いを記します。

冒頭の40節はマルコ9;37に共通構造を持つ並行句があります。そこでは子ども(「最も小さい者」)の受け入れが問題となっています。したがってこれらの伝承はもともと子どもに対する思いやりを教える初代教会の教育的内容がベースになっていたのでしょうか。おそらく初代教会は方々の町々で子どもへの教育も担っていたことかと考えられます。それは子どもを大人の反省の鏡とするイエスの思想を出発点としています(マルコ10;15)。しかし、福音を信じた者が子どもようになった者であったとするならば、子どもはイエスの弟子である「あなたがた」(40)となり、42節でははっきりと弟子と同定しています。つまり、派遣とは弱く・小さな者の代表である子どもを無条件に受け入れる資質の養いであることが分かります。

41節はマタイのオリジナルです。「預言者」と「正しい者」(義人)を並列させるのはマタイだけです。ここにはマタイの所属した初代教会の状況が反映されています。預言者も義人も初期の教会内の職務でした。彼らはイエスの遺した言葉を語り継ぎ、とりつぎ、解釈して聞かせ、各地を巡回して宣教していました。イエスに倣って何も持たなかったのも、伝道先で受け入れてくれる者を見つけるまでは水一杯も飲めないという有り様でした。しかし、彼らはキリス

トの代理人であるから、彼らを迎え入れる者はそれにふさわしい報いを終末の裁きの時に受けることが約束されるとマタイは記すのです。

マタイはこのようにして派遣説教を11章1節を以て閉じてゆきます。その中には迫害や逃げ出しの許容もあったのですが、最終的に彼が編集した総括とは「あなたは神と人に受け入れられている存在である」という暖かなイエスの側からの寄り添いなのです。それがたとえ僅か水一杯だったとしても、差し出す人には必ず報いが約束されるように、人を受け入れる時、自らも受け入れられるのだという確信が語られるのです。

いのちの実感を表現する言葉とは何なのでしょう。正しさでしょうか。そうではないと思います。それでは高さや清さでしょうか。それも違うと思います。それは暖かさなのではないでしょうか。暖め暖められてこそ、わたしたちは生きているいのちの実感を味わい知ってきたのです。正しく・高く・清く生きてさえいれば良いのだと考えてしまう心を恥じ入らしめるような暖かさがいのちの実感なのです。それなら、正しくなど生きる必要はないのではないかという反論が出そうですが、それはいのちに必要なのは暖かさであることを味わっていない者の饒舌にしか過ぎません。まず、暖かさに包まれていることに気づくこと。これが受け入れられている者に与えられる報いであるとイエスは説くのです。